

男女共同参画・非・常勤研究者支援ワークショップ

現象学を（用いて）どう教えるか——教育に関する情報と知見の組織的な共有に向けて

提題： 吉川孝、陶久明日香、小嶋恭道

司会： 小手川正二郎

オーガナイザ： 秋葉剛史

要旨

日本現象学会男女共同参画・非・常勤研究者支援ワーキンググループでは、毎年の大会時にワークショップを開催している。本年度は、主に非・常勤研究者の支援を目的として、教育活動に関連する知見やノウハウを広く共有していくことをねらいとしたワークショップを行いたいと考えている。

今回のワークショップの構成は例年と異なっているので、先にその点について説明しておく。本ワークショップは二部構成で進められる。まず第一部では、三名の提題者により、現象学に関連した授業の実践例を紹介してもらおう。具体的には、吉川孝氏（高知県立大学）と陶久明日香氏（成城大学）には大学での、小嶋恭道氏（神戸大学／京都市立西京高等学校）には高等学校での、現象学に関連した授業の実態ならびに実践例についてお話しただく。これに続く第二部では、参加者によるグループワークを予定している。すなわち、会場の参加者にいくつかのグループに分かれてもらい、現象学関連の授業においてどのような難しさや問題があるか、それらを克服するための工夫やテクニックにはどのようなものがあるか、といった点に関してそれぞれの経験や知見を出し合ってもらい、最後にそれらを全体で共有することを目指す。

このような企画を立てた理由はいくつかあるが、最も大きいのは、常勤研究職を志望する研究者にとって、教育業務への取り組み方が一つの大きな課題になっていることである。一部の大学院では、大学での授業の仕方についてのセミナーを設けているものの、多くの若手研究者はそうした訓練を受けることなく、一から自分で試行錯誤しつつ授業を作り上げていかなければならない。このような作業は、とくに自身の研究上の業績を積み上げていく必要のある求職中の研究者にとって、ともすれば過剰な負担になってしまうおそれがある。教育に関する知見やノウハウを持ち寄り共有することは、こうした負担の軽減、そして効果的な授業運営につながるものとして意義があると考えられる。

また、このような知見の共有は、大学の研究職と並行して、高校や高専などでの教育職を将来の選択肢として視野に入れている研究者にとっても役立つ可能性があるし、そうでない者にとっても、教育活動の面白さややりがいに気付くことで後者の選択肢に目を向けるきっかけになるかもしれない。さらにもちろん、すでに豊富な教育経験をもつ者にとっても、上述のような共有作業は、自分の教育活動をあらためて振り返り、それを改善するための機会になる（そしてこれはさらに、わが国の現象学関連領域の教育水準の全体的な向上にもつながる）かもしれない。

ワークショップ当日は、教育経験の有無や多少にかかわらず、多くの方々による積極的な参加を期待している（自分で教えた経験はなくても授業を受けた経験はあるはずで、その観点からも言えることはたくさんあるはずなので、気兼ねや遠慮は無用です）。今回の作業が、個々の負担を減らしつつも効果的な授業を行うことができる仕組みをつくる第一歩となればよいと考えている。